

雲かがやけば
希望あり

橋本徳壽著

雲かがやけば

希望あり



橋本徳壽著

改造社版

昭和二十五年二月十日 印刷
昭和二十五年二月十五日 發行



雲かがやけば希望あり

定價二百五十圓

著者 橋本 德壽

發行者 平田貫一郎

東京都中央区京橋一ノ三

印刷者 加藤 新

東京都千代田區神田神保町一ノ四六

發兌 改造社

東京都中央区京橋一ノ三

振替東京八四〇二

電話京橋(56) 一六二〇
五六一九

印刷所 東京都千代田區神田神保町一ノ四六 文化印刷株式會社
製本所 東京都港區芝南佐久間町二ノ一 株式會社小高製本所

目次

一 世紀の放送	(五)
二 新嘉坡退去	(三四)
三 レンガムの抑留生活	(四九)
四 クルアンの検査検問	(一四六)
五 レンバン無人島日記	(一七一)
六 内地歸還命令	(三〇〇)
七 浦賀上陸	(三五一)

装 幀

熊 谷 九 壽

雲かがやけば希望あり

前　書　これは私の南方日記の一部だ。當時私は第七方面軍軍政總監部（在新嘉坡）の軍屬として、南方に於ける木造船の仕事に従事してゐた。本書では無條件降伏の昭和二十年八月十五日から、新嘉坡退去、馬來半島のレンガム俘虜生活、蘭領の無人島の俘虜生活、内地歸還までの日記を収めた。日日の生活を更に克明に書きたかつたが、許された一冊のノートと一本の鉛筆では、それがいつまで續くかが危ふまれた。ここに書かれたことには少しの誇張もなく、いささかの偽りもない。それは本書を讀んでくれる、同じ俘虜生活をした幾萬の人たちが同感してくれると信ずる。本書によつて多少でも當時の私達の状態がわかつてくれれば幸である。

無人島にあつて、いつ還れるともわからぬ朝夕、果して生きて再び祖國の土を踏めるかさへもわからぬ朝夕にあつて、落日にかがやく赤道直下のあの多彩に焼ける雲の美しさ、それを眺めることだけが、私達の明日への生きる希望であつた。以つて書名とした。

當時新嘉坡は昭南島と呼ばれ、日記にもすべて當時のままに昭南といふ字を存してゐるが、現在はその新嘉坡と、あらためられてゐることは斷るまでもない。

著　　者

一、世紀の放送

八月十五日 (水) 曇、雨 一二四・五度

十時半に第七方面軍司令部裏門廣場に集合。今日は午前午後を通じての密林突破行軍だ。時刻になつてもなか／＼出發しない。横手大尉の來たのが十時五十分だ。ぼつぼつ雨さへ降つて來た。何か常と變つたことがあるのではないかと思はしめる。出發に先だつて、「今日の行軍は都合によつて午前だけにいたします」雨模様の故ではない何かを感じさせる。

軍人區隊を先頭に四列縱隊で、昭南神社參道にむかつて行進する。私は昨夜から下痢だ。今日の行軍に差しつかへてはと、昨夜からいく度もクレオソートや下痢止をのんでゐる。今朝も二度ばかり下痢をして、困つたなと思ひつつ、強ひて出て來たのだ。神社の手前を右折して、小高い草山にのぼつた。そこは中國人の墓地で、腰から上までにのびた薄のやうな茅萱の原だ。頂上で小休止をする。横手大尉から、地形の見方に就いて實地の説明がある。私には大そう面白く參考になつた。草のなかに腰をおろしてゐると、海の波と同じやうに、吹く風に、草の波が私に向つてうねつてくる。高いところから見ると、昭南島といふ小島は小山と浅い谷との連りで、市街地と、椰子林と、ゴム林と密林と、草原と灌木の原始林と沼澤地とで出來てゐることがわかる。

ふたたび行進がはじまる。樹林のなかにぼつ／＼とある中國人民家の背戸をぬけたりもする。ド

リヤンの樹があつてドリヤンがなつてゐる。道に出て駢足行進、腰をちぢめ、坂をのぼるやうな姿勢で走る。どこまでつづくのかたふれるまでやつてみたい。再び草山の不齊地にのぼつて小休止をした。「休め」になるまへに、一同を整列させて横手大尉が「各自服装を正せ」「天皇陛下におかせられましては、本日十二時に、國民に向つて親しくラヂオ放送をなされます。いま恰度十二時です、宮城に向つて最敬禮をいたします」何か、はつとする異様な感動をうけた。「このことはあまり他言をしないように、聖旨のほどは追つてお知らせすること存じます」

行進がはじまつた。雨も相當に降つて來た。司令部まへの高等官集會所に戻りついたのが十三時だつた。「十五時まで休憩します、いまから辨當をつかふ」畏れ多くも天皇陛下の御放送、未曾有のことだ。この重大戦局に關することであらうが、「陛下と共に死ぬ」といふことならば、何も今更あらためて勅語をくだし給ふ必要はない。辨當を食ひつつ、みんないろ／＼と話し合つてみるが、わかる筈がない。十五時に司令部にあつまつて、司令官から何か話があるのかと思つたが、さうでもなく、十四時半に解散となつた。私は宿舎に歸つて熱い湯にはいつた。汗と雨とで背中がぞく／＼するのだ。こんな所で、こんな時に病氣になどなりたくない。

第七方面軍司令官板垣征四郎大將は、今朝の飛行機でサイゴンへ行つたさうだ。南方軍最高指揮官寺内元帥と重大な打合せのためらしい。思ふに日本は聯合國側に對して、無條件にも等しい惡條件のもとに講和をするのではあるまいか。私は近頃次の様な考へをもち、人にも語つてゐる。「武力に於て日本は到底勝算はない。一日やれば一日やるほど、日本は立ちあがる力を失つてゆく。耐へ忍べざるに耐へる時はいまだ。屈辱的な條件でもよいから講和をしろ、維新以來の新領土を返してしまつてもよい。更に一步ゆづつてもよい。いまのうちに少しでも多くの力をのこして講和をしろ。いまこ

で面子など云々してゐては日本國といふ元も子もなくしてしまふ。少しでも元をのこすことが祖先に對し祖國に對する吾々のつとめだ」私は、ほんとにかう思ふのだ。さう云つたら若い血氣な池邊大尉は私を非國民呼ばはりしたが、日本を生かす道はこれよりほかにないと信する。

八月十六日（木） 晴、曇 三六度

畏くも天皇陛下が日本國民に對しての御放送を、ここ南方の日本人にきかせないといふのは何ういふわけであらうか。進んで一人でもより多くにきかせようとすべきではあるまいか。それをここでは今日になつてもきかせないのみか、あらかじめ今日に備へてか、五六日まへから軍人軍屬の短波受信機さへとりあげてしまつた。南方の第一線は、最高指揮官の命令によつて、独自の動きをしなければならぬのであらうか。昨日の同盟通信を讀むと、内地新聞の記事が出てゐる。それは恰も日本が無條件降伏をして、その後に来たるべき、處すべき日本國民の態度について、當局の意志を代辯してゐるとしか思はれない。「忍ぶべからざるを忍べ」「輕舉妄動をするな」「祖先を思ひ國體を護持せよ」といふにある。戦ひぬいて國體を護れといふ文字はどこにもない。一時の屈辱をしのべといふにしかない。きくところによると、全戦線にわたつて「停戰命令」が出たとのことだ。平和の鐘ではなく、日本人にとつては葬送の鐘である。木堂中尉が司令部から「重要書類、機密書類は全部焼却せよ」といふ命令を受けてきた。獨立印度國民軍の營舎のまへに、ローリーがたくさん並んで、女兵たちが、てんでんの荷物をのせてゐた。もう獨立印度軍でもなくなつたらしい。彼らは何處へ何ういう風になつてゆくものか。

午後大東亞劇場に映畫を見に行く。「かんざし地蔵」といふのをやつてゐた。かへりの道に日本軍人、軍屬、女子軍屬たちがあふれてゐた。中國人、馬來人、印度人たち、のん氣に、あるひはいそがし

げに歩いてゐること、常の日と少しのかはりもない。不穩の様子など更がない。宮野、池邊、私の三人が話しながら歸つてくるあとに、二人の中國人が寄り添ふやうにしてついでくる。何か日本人の話が盗みききたいらしい風だ。三人の話をそれに觸れさせないやうに、それとなく私が、話題を轉じ轉じた。

ビルマでは日本の軍票を五分ノ一に英軍が引かへたさうだ。馬來では何うするのだらうか。まだ市中で軍票が通用してゐるのかしら。司令部では誰も仕事は少しも手につかず（といふよりも、仕事はなくなつてしまつたのだ）あつちこつちにかたまつて、話ばかりしてゐるさうだ。研究所も仕事がない。特攻艇の試運轉も意味のないことになつた。

午後は曇つて風がつめたくなつた。いつまであの宿舍にゐられることやら。近いうちに英軍の俘虜と入れかはりになるのではないかな。今日の司令部口達は「新世界、指定、利用飲食店以外の飲食店に軍人軍屬は絶対に立入らぬこと、公私用をとはず單獨外出をせぬこと」などが特に注意された。現地人の暴行を怖れてであらう。シンガポール占領後に中國人を大量に處刑したが、その怨みを中國人が忘れてはゐない筈だ。「軍屬も常に武裝して外出すべし」ともいはれてゐる。

八月十七日（金） 雨二五度 冷めたし

昨日交通隊の肥爪閣下が研究所に來たが、この閣下は十五日以降に起つた新事態については何も知らないし、感じてゐない。至極否氣な閣下もあつたものである。またなかには料理屋専門の參謀や「無謀、横暴、亂暴」の參謀もゐるといふことだ。それにしても第七方面軍司令部から、いまだに何の沙汰もないのは何うしたといふのであらうか。知らないのは司令部管下の軍人軍屬だけらしい。獨立部隊では、小部隊でも部隊長から、兵に對して十五日の御放送の聖旨をつたへたさうである。

ひるすぎにビール會社に鶴田氏を訪ねた。「ビールはいくらでもあげます、八百本あります」とのことだ。八百本の本が何ういふ單位かしないが「ビールでマンデーをしませんか」とのことでもあつた。現地人特に中國人たちは、私たちよりもはるかに、何かをよく知つてゐるらしい。「英軍の時はこんなではなかつた。日本軍はさすがにおちついてゐる」と、噂してゐるさうだ。冷めたい雨が降つてゐる。戦敗日本を悼む涙の雨のやうにも感じられる。今日の口達命令は「必要以外には夜は外出せぬこと」「十九日までに日記感想の類を焼却すること」などであつた。夜、私は自室で少しばかり焼いた。手紙は先日大量に整理したが、とつておいた家族たちの手紙も焼いてしまはふ。かうして書いてゐる日記もやがて焼いてしまはねばなるまい。

眠つてゐる所を隣の宿舍の大戸技師の聲でおこされた。「十八日十一時五十分に司令部廣庭にあつまれ、といま電話があつた」とのことである。夜中の一時すぎであつた。冷めたい夜で、毛布を二枚かけて寝る。

八月十八日 (土) 曇 一三六度

十一時四十分にはもうみんな司令部の廣庭に整列してゐた。司令部の軍人が右翼、次が女子軍屬、次が軍政總監部、外局といふ順だ。曇つてはゐるが、背中に流れる汗を感じる。綾部參謀長、板垣司令官の順序で出場、喇叭にはじまり、宮城に敬禮、君が代齊唱一回。聲がふるへて、時々出なくなる。生れて五十二年、こんなに悲しく君が代を歌つたことはない。板垣大將壇上にすすみ、國民に賜りたる勅語を読んだ。不動の姿勢をとりつつも、ともすれば前に倒れんとす。涙おのづと湧きいで、あちこちに鼻をすする音きこゆ。つづいて軍人に賜りたる勅語を読む。これは十七日の日づけで、さきの勅語は十四日なり。「朕が身を裂かるるの思ひあり」の御聖旨あり、日本建國三千年、いまだか

つて斯かる哀しき御言葉を仰せられたることありや。最後に板垣大將「輕舉妄動をいましめ、ひとへに大御心に添ひ奉らん」と訓辭し「然れども協定きまらざるうちに、敵この地に寄するあらば撃滅せん」と剛き決意をしめして閉づ。喇叭にて式をはる。曇りたる空より、かすかに日射したり。

午後は研究所で文書の焼却をする。私が精魂をこめて設計した數々の船の圖、燃えつつおのれ旋風を呼びおこし、燃えつつ空に高くあがる。日本から持つて來たあまたの船の圖も焼く、身を焼かる痛みを感じる。斯ういふものはこのまま敵側にのこしてやればよいのだ。何の秘密もありやしない。愚な命令だ。黄女史が來た。大きな洋菓子をもつて來てくれた。前に貸した「日本文法」を返しに來たのだ。あらためて進呈する。そのほか、そこらにあつた、石鹼、靴下など、手あたり次第にくれてやる。女史曰く「日本は敗けたものではありません。こんなに長いあひだ、こんなに廣く占領し、世界中を相手に戦つた國は世界歴史にありません」この女史から斯うした慰め言葉をもらはふとは思はなかつた。

すべてを焼却した研究所は、さうでなくてもガランとしてゐたのだが、まつたく原野のやうな感じがする。本當にもう何も用はない。臨時囑託はこの際、それぞれの出身商社にかへすといふ噂もある。

十八時に昭南造船所に行く。私の設計した六十噸高速輸送船十隻を建造した、中國人船匠を表彰する式があるのだ。一等から七等までにわけ、それぞれの組へ何萬圓づつかを賞として與へた。現圖場で式があつた。大勢の中國人たちが喜びの顔を並べてゐる。一と組が賞狀と賞金とを貰ふたびに一同が拍手をする。「この船が役にたつやうに、こん後とも、いつそう日本軍に協力してくれ」と述べた川添隊長の言葉は、日が今日であるだけにいつそう悲痛にひびいた。列席の中國人たちはみ

んな、日本の降伏を知つてゐるのだ。式後、その場で祝宴がひらかれた。中國人たちは、酒をのみ、ものを食ひ、心からたのしげである。降伏した日本軍に、それなるが故に、いつそうしたしみを寄せてゐるかの感じがした。

阿南陸相自刃の噂あり。内閣更迭、なにがしの宮殿下が首相になられた、などの噂あり。更にまた日本の四ヶ所（鹽釜、千葉縣、伊豆半島、更に一ヶ所）に米軍既に上陸の噂あり。

八月十九日（日）曇 午後雨 一二五度

市街は非常に平靜穩和だ。現地人の誰も彼もが、ことを充分に知りつつも、面と向つて口に出すことは慎んでゐる。今日の昭南新聞にはまだ大詔を報じてゐない。ただ「大詔が發せられた、日本人は新たに進發せねばならぬ、大なる忍耐を要する」と抽象的に一二行ふれてゐるのみである。あつさりとなぜ發表してしまはないのであらうか。昨日昭南造船所で會つた能見氏の話では、一般邦人に對して、興南奉公會から、昨日通告があつたさうだ。

英俘虜を滿載したローリーが、いつものやうにオーチャードを走つてゐる。走りつつ俘虜たちは喜びに顔をかがやかせて、兩側の現地人たちに手を振つてゐる。どんなにか嬉しいことであらう。忍苦四年、やうやく祖國にかへれる希望がひらけたわけだ。私たちは何うなるのか、彼等と代つて、チャンギー其他の收容所に入れられるのであらう。「さういふことはない。出来るだけ早く内地にかへすだらう」といふ説もあるが、臆説にすぎない。

十二時から司令部醫務室で各種傳染病の豫防注射があつた。

軍では私を出身社にかへすか何うかといふ話が出てゐるらしい。昨日も私に話があつたから「軍にくるに就いては私の意志は少しも働いてゐない。軍と社長との話し合で私は來たのだ。今後の話も、

軍と社長との間でやつてくれ」と私は答へた。抑留者（俘虜とは扱ひがちがふらしい）として苦役を科せられるとしても、軍人軍属に重く、一般邦人には軽いだらう、内地歸還も一般邦人が先である、といふ説もある。私は罰の重い軽いで動きたくはない。すべては天命にまかせる。いかなることも黙々と受ける。ことに私は「一にも船、二にも船、三にも船」であつたその船を造つてゐたのであるし、南方軍の造船計畫にも参加してをり、敵側からいへばせれば相當に罪はあるわけだ。それを充分に感じてゐる。受くべきものは従容として受ける。夜各務所長が私の宿舎にその件で來た。明朝までに軍に確答するのださうだ。社長はクワンタンで不在だ、社長の意志をきくわけにはゆかぬ、とすれば軍と社長との今迄どほりの約束を繼續するよりほかにあるまい。「いままでどほり」と、きつぱり答へた。

池邊大尉が手紙を焼きはじめたので、私も焼いた。使用人室のそとの釜で焼いた。ひとくべ、ひとくべ。ひとと炎、ひとと炎。感慨無量のものあり。四十分ばかりかかつた。裸になつても熱く、汗がだくだくと流れ、汗の肌に、焼かれた紙片の、黒いすすい灰がべたべたとはりついてはなれない。

夕食には、とつて置きのアスパラガスの罐を切り、牛罐を切り、玉子焼までこしらへた。近頃になり豪華な食卓であつた。たべてゐる所へ、黄女史姉妹とその友人の少女とが來た。パイ罐を切つてふるまふ。私がいよいよここを退去するときには、いろんな家具をやらうと昨日言つたので見に來たのであらう。三人に洗濯石鹼とパイ罐とをたくさんもたせてかへした。彼女たちはあかるいうちに自轉車でかへつて行つた。

八月二十日（月） 朝二四・五度 曇、スコール、晴、一九度

明け方、うとうとしてゐると突然「ドーン」と鳴つた。何だらう、大砲かな、高射砲かな。時計を

見ると七時だ、眞暗い。つづいて十發以上鳴つた。ビリビリツと空氣が振動してくる。近い。敵機かな。あるひは現地人に對する一種の意思表示かな、(妄動をいましめるための)やがて飛行機のにぶい音がきこえた。それなりけりだつた。

今日は種痘があつた。その時河村軍醫大尉曰く「これからは天幕生活でゆつくりした時間があるでせうから、ゆつくりと教へていただきます。」すでに收容所生活を覺悟してゐるのだ。

ケーンヒルに永福紳氏を訪ふ。氏は肋膜で、まったく動けないで寝てゐた。社長夫人が四五人の中國人を督勵して家財道具を整理してゐた。商社はこの二十四日で取引を停止され、その後は聯合軍側の監督のもとに行はれるのださうだ。

今朝の音は、イバラ機關で火藥庫か何かを、自發的に爆發させたのださうだ。昨日はローリーで幾臺も小銃彈をどこへか運んでゐた。オーチャード警察のまへを左へ走つて行つた。

汽車が匪賊に襲撃されたさうだ。「いまに英軍が來たらなほとれなくなる、いまのうちに物資を出來るだけ奪つて置け」といふにあるらしい。街のあちこちでローリーに家財を積んでゐる。引越ではない、賣拂つてゐるのであらう。各日本商社のもの、一般邦人の物が、かうして只のやうな値で引取られてゆくのである。現地人間には米がぐつと下つて一斤三十五圓になつたさうだ。然し日本人が買ひに行くのと九十圓ださうだ。タバコと玉子との交換をコツキーにたのんだ所が「街にタバコがたくさんある。交換だめ、玉子一個三十五圓」といふ返事であつた。ここにも敗戦者のあはれさがある。夜ひとりでビールをのみ、飯をくつてゐると、三田滯人氏が一升壺をさけて遊びに來た。

八月二十一日 (火) 晴、くもり、雨 二七度

昨夜の三田氏の話では「軍人軍屬を無事に内地に還し、然も内地まで軍人の體面を保たせて、帶刀

銃を許させてもらひたい。それがむづかしければ、乗船するまでも、さうさせてもらひたいと聯合軍側に申込んでゐる」とのことだ。また、今朝の瀧本氏の話では「内地へは既にソ聯軍が上陸して、日本軍は京都に集結させてゐる。日本軍は將校十年、下士五年、兵三年の勞役を科す」とのことだ。マレーの日本女性是一般邦人も軍屬も、すべてあらためて軍屬とし、特志看護婦として病院船で歸國させる。吾々司令部と軍政總監部との軍人軍屬たちは、司令部に集結してそこに起居する、といふ噂もある。今朝は藥品、タオル、襪、鼻紙、チーズ、酒などの特配が軍からあつた。

十五時半から司令部の高等官食堂で、聖旨の傳達式があつた。天皇陛下には、現地軍をふかく御心にかけて、關東軍へ竹田宮殿下、支那派遣軍へ朝香宮殿下、南方軍へ閑院宮殿下をおつかはしになられたのだ。このことを陛下には臣下の誰にも御相談なされることなく、まつたく御聖斷によられたのだ。板垣大將が聖旨を奉讀したのち、綾部參謀長から懇々と話があつた。「九日の夜まで重臣會議を幾度ひらいても、ボツダム宣言を受諾すべきや否やが決定しない。十三日に陛下の御聖斷によつて受諾と決定された。その日皇族會議があつた、席上閑院宮殿下は『國體の護持を敵側は許さぬのではないか』と申上げると、陛下には『それについては強い信念がある。國體の護持は絶対に大丈夫である』と、きつぱり仰せられた。次いで海軍の一元帥（永野か）と陸軍の二元帥（杉山と畑か）とを召された。三元帥は一致して『今までは一人で十人を倒さなければならなかつたが、今度は十人で一人を倒せばよいのだ、必勝確實だから、もう一度思ひかへして下さるやうに』と申上げたが『卿等の意見はきき置く』といふのが陛下の御回答であつた。一そしてつひに十四日の大詔煥發となつたのである。」「式中にうしろの方で何かごたごた音がした。あとでわかつたのだが、女子軍屬の一人がたふれたのであつた。